

# 火星

平成二十五年六月号



七曜抄 (八)

山尾玉藻

青嵐に目覚めし山の上ホテル

子規の机撫でうべなへり青葉冷

しようこりもなく卯の花の夜を遊ぶ

六月やインド更紗に象の列

麦熟るる中を深層水さげて  
みづうみの沖に紺さす更衣  
下闇を来て真つ白の治療台  
水の面のふいに眩みし薔薇サラダ  
雨の日のきれいに煮あげ鬼虎魚  
墓発条ねむらせてある容

# 太白星

石 落しより梅林の風のいろ  
若 布干す村に正午の時報あり  
塩 焚きし釜あたたかな春の宵  
飴 いろの樹液を流し芽吹の樹  
し らさぎ橋渡つてきたる種物屋  
美 術館と学校隣る花の雨  
花 冷のこぼれて紅き鮑屑

杉浦典子

浜口高子

一枚岩の橋の倒影冴返る  
生飯台の乾びてをりし夕おぼろ  
オットセイの水しぶきたる花あかり  
背濡らし風邪を引くなよ青蛙  
老眼鏡ずらして墓の眼と合ひぬ  
昼ひとり春の蚊ほどの声の出で  
吊しある燈に土や遠蛙

# 火星作品

## 山尾玉藻選

嘯の島へ引き潮どきの径宝塚山田美恵子

末黒野をつたひ雨くる彼岸寺

たてよこに紫雲英田歩く測量士

百千鳥航跡の白いつまでも

汐満ち来うすくれなるの絵踏板

百年の樹が見え水の温みけり  
蘭定かず子

尾を丸め眠るものらに春満月

麗らかや紙切つて花かたどりぬ

末黒野を歩いてゆけば月の舟

百年の後め小鳥へ木の実植う

ごちやごちや言はず千切りの春キャベツ  
八幡坂口夫佐子

羽音きて羽音飛びたつ葦の角

ぬかるみよりぬかるみへ跳ぶ青蛙

観音へ畦のあつまる花菜風  
洛中のかすみさぐりし亀の首  
研ぎ屑の堆朱のいろや光悦忌  
ぬかるみのひかり蔵せり椿山  
藪椿やぶのおほかた花まみる  
奥宇陀の月に暈ある猫名残  
比良八荒まばらに濡れし四足門  
猫柳水の光を放ちをり  
水音の底を走れる雪解畑  
湖心へと広がる蒼さ別れ雪  
羊蹄山をけづる響きや雪解川  
強東風を捉へ鴨一直線  
三月の風に音たつ半旗かな  
春服の閉ぢし宮沢賢治集  
払うてもはろうても羽虫水温む  
中の洲に眠りの浅き春の鴨  
鳩小屋の静もりに出づ春の星

神  
戸  
深  
澤  
鱻

札  
幌  
大  
内  
和  
憲

箕  
面  
西  
村  
節  
子

# 選のあとに

山尾 玉藻

べているのだろう。作者の一括があったかどうかは解らないが、痛快な一句である。

汐満ち来うすくれなゐの踏絵板

山田美恵子

ぬかるみのひかり蔵せり椿山

深澤 鱧

私が見た踏絵板は金属製で黒っぽかったが、掲句のそれは薄紅色をしていたのだろうか。それとも、その昔長崎奉行所は民衆の前で着飾った遊女に裸足で絵踏みさせたと聞か、その史実が作者のところに働きかけた独自の感覚であったのかも知れない。いずれにしろ「うすくれなゐ」は血と涙を流した信者の悲哀が滲みでたような色であり、作者のこのろの写生として共感できる。「汐満ち来」が悲しみや切なさをゆつくりと増幅するようだ。

百年の後の小鳥へ木の実植う

蘭定かず子

猫柳水の光を放ちをり

大内 和憲

当然のことながら、木の実が百年後に立派な大樹となり、そこで鳴く小鳥たちの囀に耳を傾けることは、作者には出来ない。しかしそこに夢があり詩どころがある。中七までの措辞がなんとも素敵である。

ごちやごちや言はず千切りの春キャベツ

坂口夫佐子

潤滝を風かけ上る山桜

大山 文子

春キャベツを千切りにした生はシャキシャキと歯触りが良く、ほんのりとしたその甘味は実に美味しい。皿に盛られた千切りの春キャベツを前に、誰かが何かの不服をくどくど述

雨季以外は水が流れていない滝なのだろう。そんな潤滝に実際には見えない筈の風を見た断定できたのは、山桜の花びらが風に乗って勢いよく滝を駆けのぼる様子を目撃したからである。しかし花びらの様子には取えず、見えぬ風を対象とした点がこの句の眼目である。巧みな表現を得て臨場感たっぷりである。

(以下略)



# 恒星圈

戸栗末廣

高尾豊子

春の蚊のいつのまにやらぬなくなり  
初蝶の吹き飛ばされて黄泉の国  
雄鶏の一声野焼跡凹み  
丁寧にお辞儀する子や蝌蚪の紐  
百姓に諍ひ多し蝌蚪の紐

高松由利子

反転す鷗に鮎子船の着く  
初蝶やコンテナ切れ目なく過ぐる  
重ねたる刺子の野良着よなぐもり  
火色見る鍛冶屋へ春の水足しぬ  
練群来奥に飾りの釘隠し

戸田春月

椿見て日向に出でし利休の忌  
夜をこぼむ法念院の落椿  
かたまつてお王杓子のひとつづつ  
酒蔵に舞妓と出合ふ弥生かな  
石垣の隙より現れし春の水  
水温む京の五条に人待てば  
芽柳をのれんくぐりに男来る  
荷解きの紐が区切れる苗木市  
豹柄を着て春愁に抗へる  
母と子に遣らずの雨の遍路杖

野澤あき

朧夜の地下に眠れるワインかな  
小流れの音さへ春となりにけり  
春の夜やちちははの亡き爪を切る  
しあわせの村しあはせの春の月  
子午線の街をうろろう花の冷

# 獅子座

山尾玉藻推薦

西村節子

対岸へ一羽遅るる日永かな  
岡の上のベンチ初音のありさうな  
常夜燈ともる頃なる遠蛙  
紀伊水道の風あらあらと初桜

藤田素子

口笛はビートルズなり草青む  
レタス食むどこかに水の音のして  
おぼろ夜の父の鳴らせしレジスター  
蛇穴を出でかたちよきヒップあり

涼野海音

雲雀野にパンの袋を開きけり  
いかなごのどの眼も澄んでみたりけり  
望遠鏡覗けば海や建国日  
鳥雲に畑に光れる貝の殻

根本ひろ子

嘯のこゑぞんぶんに小町寺  
金剛山の風の冷たき藪椿  
亀の頭のぽかりと浮ける彼岸寺  
嘯や大正硝子波うてる

田中文治

遠吠えに春満月の沈みけり  
よそ様のこともうれし桃の花  
そば殻の枕ほころぶ鳥の恋  
春雷や網ひろげるある浜の砂

藤本千鶴子

サーカスのテント張る波止鳥雲に  
三門の声の降り来る御開帳  
紅梅に山寺の屋根見失ふ  
ガレージの屋根をまろびし恋の猫

上原悦子

春深し湯気のにほへるアスファルト  
遠足の仰ぐ極彩仁王像  
水がれの石の水門亀の鳴く  
朝の日のフェンスに蝶の生まれけり